

尾身氏「次のパンデミックへ知見生かす」感染症会議 第9回日経・FT感染症会議

022年11月15日 日本経済新聞



開幕した日経・FT感染症会議で発言する尾身茂氏（15日、東京都目黒区）

新型コロナウイルスなど世界で脅威となる感染症について、国内外の専門家が対策を話し合う「第9回日経・FT感染症会議」（主催・日本経済新聞社、共催・英フィナンシャル・タイムズ）が15日、東京都内で開幕した。パンデミック（世界的大流行）に備える平時からの危機管理機能の構築や医療体制のあり方、国際的な医薬品・ワクチンの迅速な開発・供給などについて議論する。

会議の議長を務める、政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会の尾身茂会長（公益財団法人・結核予防会理事長）は「次のパンデミックに対してどう対処するかが大切だ。国は危機管理の司令塔機能の構築を考えている。（いかに実効力を持たせるか）会議参加者の経験と知識を生かし、一つのたたき台を示したい。日本が国際社会にどう貢献するかについても、今回の会議の重要なテーマとなる」と話した。

世界保健機関（WHO）のヤカブ副事務局長は、基調講演としてビデオレターを寄せた。新型コロナを巡って「安全で有効なワクチンを120億本以上製造・配布した世界の対応は、科学にとって歴史的勝利だ」と述べた。一方、「ワクチンなどが最も貧しく弱い人々に確実に届くよう公平性に注力すべきだ」との立場も強調した。

コロナだけでなく、「世界は結核やマラリアなど重大な感染症に対して、持続可能な開発目標を達成するための軌道に乗っていない」とも指摘。医薬品をはじめとする安全で効果的な対策の開発や、政治や財政面で国際連携や関与をさらに積極的に進めることが必要だとの認識を示した。

会議は16日まで都内のホテルで開く。国内外の政府や企業関係者、感染症やグローバルヘルス（国際保健）の専門家らが参加する。会議の様子はオンラインで視聴できる。